

元治記事

五

和書門			
類	號	函	架
一五八七四	二〇三	一四	七

內閣文庫		和書	
類	號	冊	函
一五八七四	一	三	五

內閣文庫	
番號	和 15874
冊數	17()
函號	151 20



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



左少無少也上忍少礼之津強前留于入百五拾人狂
討五案七散乱印

魯自敵妻之十日家自以一日史馬山定一説
魯自敵抗之成言

一橋之少以馬 所所之退前也日身七拾拾
西門下押考之長馬帽子持衣少代十割相形之依
而之凡洋也

一 石西之敵平十九日朝六時五十分六時五分止

以逃散死多之在野死骸車山福之様之

引五

一 寺町誓形之三千人平之在何也

一 女日夕松山之津薩丹出張之鐘之嵐山之持敵史
抄部之人牛神

一 女一日午後山傍之山之津反走歩出張之留執
又六人切後之山之津敵史之

塔斗古張

一 福尔成後魯自敵之切後之

一 増田石馬之丹波之

一 町奉行所

此後敷焼焼屋に米を米蔵に下りて東西に所あり
下りて路通焼屋に中へ之を愛せ後破屋を以て
取出

七月廿一日

町奉行

一 薩州極

米五百俵

右長州流流天龍寺に於て米を御多押に以り
敷焼焼屋に之を取出し以り早稲町に幸寄る

薩州極 薩州極 薩州極

薩州

一 廿三日

大坂長州極屋敷に町奉行松平大膳より旨付徳永色
税を係京都流流方押方尚書に五瓶に正量に以り
迷てお破屋敷に上りて依りて米を以りて 懐中付書
お破屋敷に

一 大坂表より薩州極に

一 京都より山陽海に之係ありて七百石に所

高も... 南村舎を...
長唐舎

一 播州家... 松平... 碓氷... 風...

系... 十九... 倉庫... 紀...

取上陸... 中... 又... 川...

一 大坂市中... 一 時... 一 石...

一 大坂市中... 一 時... 一 石...

一 石... 一 時... 一 石...

一 石... 一 時... 一 石...

長唐... 碓氷... 紀...
碓氷... 紀...
碓氷... 紀...

碓氷... 紀...

碓氷... 紀...

碓氷... 紀...

碓氷... 紀...

碓氷... 紀...

一 近所... 代友... 所... 村... 方... 控... 物... 所... 有... 之... 中... 軍... 艦... 之... 色...

一 近所... 代友... 所... 村... 方... 控... 物... 所... 有... 之... 中... 軍... 艦... 之... 色...

一 近所... 代友... 所... 村... 方... 控... 物... 所... 有... 之... 中... 軍... 艦... 之... 色...

作也

一日由用... 以...

伊達幸江守

松平右衛門... 遠く... 時定... 了... 松平出陣... 獨傳甲斐守

松平右衛門甲斐守

馬山... 也

八... 也

谷 大膳免

右日文之

松平右衛門甲斐守

松平右衛門... 也

来... 也

用... 人... 也

一 次 活 動 情 況 一 覧 表

松平大膳左衛門尉

上 次 浮 子 之 粥
松平 中務之備

兼 右 近 衛 少 輔 松平 大膳 左 衛 門 尉 兼 右 近 衛 少 輔

右 上 之 侍 左 衛 門 尉 松平 大膳 左 衛 門 尉 兼 右 近 衛 少 輔

兼 右 近 衛 少 輔 松平 大膳 左 衛 門 尉 兼 右 近 衛 少 輔

了 事 也

七月廿五日

松平大膳左衛門尉

中 尾 左 衛 門 尉

尚 左 衛 門 尉

兼 右 近 衛 少 輔

同 人 身

兼 右 近 衛 少 輔

神 田 左 衛 門 尉

卯 拾 三 人

皇 親 公 下 百 餘 人

同 門 出 石 氏 氏 等

小 共 二 十 人

石山寺

石山寺

二月廿七日

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

石山寺

佛所礼入于土地及礼坊以功之思
天朝不業山原毛拉在古京都
说九度坑早一修成于後

二月廿八日

山目村人等

今伊东院之序

莫后利國于外馬之為用云云

右日人

伊东院

向到于寺法友是也

右院以石等致屋板机花中列是和永寺
寺中住持

瑞之池

岩松寺

現年八十石 少林 美三郎

岩松院野則造原浪之徒乃造付
致死之通以寺家智安造美三郎

伊东是又列以之徒之

伊目見以上云

一 抄中納之殿上揚以

宸翰定乃心得お建に奉

八月

一 抄平大帳支取来も之を以て心得

一 朝廷名臣を以て抄中納之殿上揚以

一 抄中納之殿上揚以

一 抄中納之殿上揚以

一 抄中納之殿上揚以

一 抄中納之殿上揚以

一 抄中納之殿上揚以

一 親征行幸之儀甚く好り得り候に先此之旨を

一 安撫上相 行幸中出り候に

一 抄中納之殿上揚以

一 十八日一件書渡候に後取北後書中付候に

一 忠誠を用旋御令成候に先此之旨を

一 抄中納之殿上揚以

一 長州人入京を以て不宣事と存候に先此之旨を

一 抄中納之殿上揚以

一 抄中納之

一 抄中納之殿上揚以

八月二日
八月二日
八月二日
八月二日
八月二日
八月二日
八月二日
八月二日
八月二日
八月二日

一 尚多店以...

有馬中務大輔

一 批字大張...

批字大張
批字大張
批字大張
批字大張
批字大張
批字大張
批字大張
批字大張
批字大張
批字大張

一 八月三日

河内

河内
水野和泉
牧野和泉
河内
河内
河内
河内
河内
河内

口内... 所用... 阿部... 活防...

口内... 所用... 松平... 之花...

口内... 所用... 田... 中...

本園舟波寺

右院... 任...

小同封

塚...

美吉利... 所用...

用...

右院... 年...

四月廿

今原修造

所用

美吉利金分國

所免

右於新番亦未留警序
備前守中尉平足丹
波古侍從

一日廿日

所庭間

水野和泉

取平上信左吏乃

牧野俊前守

所征伐 所之及所用

石於 所前守 信守

一日廿日

四月廿

堀糸治左衛門

但馬守

美吉利國平外島

所用 信守

石於亦守於左邊
取平上信左吏乃
波古侍從

年中侍症

一 八月七日牧野御前吉原山渡

大目付

松平大指美家来丸以之志事知

朝廷之御也松平御代之御治家也

御代御代 松平續

御代御代 御代御代

御出に御多し諸之御志御成御

御代御代 御代御代

御心御代 御代御代 御代御代 御代御代

御代御代

八月 御代御代 御代御代 御代御代

一日右月人御代

御代御代 御代御代 御代御代 御代御代

松平大指美家来丸以之志事知

朝廷之御也松平御代之御治家也

御代御代 松平續

御代御代 御代御代

御出に御多し諸之御志御成御

御心御代 御代御代 御代御代 御代御代

御代御代 御代御代 御代御代 御代御代

御代御代 御代御代 御代御代 御代御代

涉汝汝之身厚古の情
石之能成後之面
抱りし何れも早之

八月

右日下海一書付

大目付下

松平公孫美家来りし之

朝足も在りて

追討に任ずるに

任ずる副将に海に松平

格家志勅に任出
右の通に任出
八月

水所初ら水古反り

大目付下

松平公孫美
任出

任出

任出

任出

下りて来る

一 八月廿日

似平之信美為

津征伐

津征伐之長津代

津例記

坪内安房守

少性恒昌以始

津用少俊次兄格

小笠原接傳守

石江 信守言於泉あは

津代 津代

閑席料理三者論

口 儒者
△ 匠者
○ 藝者

予此頃久々他行せず獨世上の騷擾をうれる
鬱々として不樂殆病ひを醸さうり一日獨歩し
て郊外を遊ひと何ふ酒店の表札を見らる閑席
料理と記して有る此も者扱書き誤りなりた
此以世上の於て閑閑鎖國の議論ありきや
それ此を可しや幸ひ腹も癒りけりや文成り
てしと容子哉見人と露路をの多見とせや座
を敷回ら有て容も亦多し涼しを知らる小座敷の

明きふぶあれきしりせと汗あしぬぐひうち
くつらき婢を呼ひて酒飯を命し隨座おと何
年の比つまこ三十よきしひ緒髪しと盤で長く
まち高袴よ生平此御衣を紋付の帷子と
柄と袴よ小袋まかせたふ三尺計の長刀後扇斜
構へるふつらと儒者と知られたるまこと又
儒者とまこと坊主あつたに紗の羽衣根付時計
を腰より取て屢時と量り見ふを病家の見舞
急しりと心遣ひしはあやあし今入ハ酌人
よといあめりたる藝者とあつた身形風俗略

て言ひをさつら押し盃の数重りて酔よ棄
口儒者 鄭声の淫なる先哲を思むところ後世思
るし僕敢て思ます嗚呼世の中を聞けむ哉
と懐中より南一げびこサアくむけく。藝者子、
ちくせとめくぞおうたひのまゐる口唐音も
三絃よ合ふられ。知りません。△医者ヲトヨシ不佞唄ふ
る。サアむよな。○チヤく。ヨイ。とそもそあな
大きれよ志やれ世界附合をばうまひ。コリヤ
口暫く三絃とむくるやと止めて僕ら説と聞け。只下
の唄小関國のまゐる言今宇内の人氣と量るふ奸説

終に將ふ開國はゆせんといふに下を來漢科お傳
三世家よ存りたり近以妄に西洋家と至張し船
來の糸只り何れをさきハ能有りといせが刺格捨血
の暴瘡と強し父母を遺體と傷て妙なりとい
彼西洋と唱ふものも禽獸の如き醜夷たるを
夫ら邪法と不用ひ

皇國人の病と治は是僕ら納むるに不ありとい
下に限りてを來ハ進下洋法流しハ奸民を
任用し以痛肩痛歯痛の如き物を用ひては瘥
よ治し下世のシヤリニ大莫り勝まるといふ人考

の病り病と治るもの多く牛痘頻りに治りて
抱瘡神産業と失ひミツチヤ面の婦人世よ之友
持糸附の娘と治り部一蒸氣船千里と遠し
と云遠州灘小便し治りて越流法日よ新し
閑りて反賊多く命と失ふ同袖と悔い人云は
くくを及の布り毒の下常と殘り或ハ編部
山間の貧民ふ毛の地を起し茶葉と植植漢
とてて言令と貪り水吞百姓は貨殖と云ふとい
甚しきにいつては神佛を願ひて必漢港
るかしんて改行ると期て奸賊國內よ充滿し

攘夷此民悟日とある消散し赤心報國正義
有志の僕ら如きとある侮り狭益頑固と誹り
り或る儒官書生の中みだりしは又漢
港と唱へ内心同國を欲するものあり
幕府の奸吏因循して夷狄と和親するは
宣彼と恐將とふのそらりや五大洲を敵
と連年の戦争國を費弊し人勞と
幕府の力をそるよみんで列國中彼と密に
通し彼ら力と傾りて吾と争ひ
幕府の権忽ち奪ふと遠謀を以て

拒絶を爲すありては奸吏の因循不絶切齒吾
徒の希望すは吾ら社稷をえより
及令焦土と爲るとも我ら一身骸骨敵と
を抑者 皇國を天孫統を継ぎ數千年お
外夷の侮りを受ふるれく社武英敏獨り我國を
奸吏因循して攘夷せよ人の群旌刻楨の愛を
生せん吾らも傍觀するも一命を以て
醜夷と血戦し掃攘して以て年十の志を
果し身と殺して國を報するは志なき者
を人小所へ禽獸と等し

○猪口と益に三先生
後三先生

さん〜モシ〜物んで有ます目よ角と之をひ
目物を出してサキの〜いマア一ツおあらんなん
よなきサキの〜笑て居ますと攘夷の頑港の
とぬるもの〜いねん事ハヨウきふも能く知いて
おり殊よも〜い事ハ小石川の隈居らんよ山ッ
右て言出〜たのり事の起り尻り〜とて
騒動と起〜今と成て〜家中の也〜れ〜
長下も其通り山ッハづき〜と〜
せ〜騒動で今で〜あ〜と〜と〜
夫人とあ〜に合〜び〜ま〜
親核〜

お〜も廻〜とお為〜尊王攘夷復古乃〜
吾思〜水戸の奸計〜を固防
〜長門〜朝敵 ロ〜
婦の長舌ある北雑の長舌其害は里杯水長
のニ属不於るを固防其言の
聞き〜加過激のあり〜押信強説
武士の夢ハ海軍學は皆 賤妙猥リふ古と勤〜
て人氣と怒〜先生〜を學考て
あ〜
ま〜遠い唐の〜も近い〜

お国々をよむむやい昔今いまま人の智せも替り
世界も改りよ開けてまゝと夷狄もむやいの夷狄で
なしく唐も昔思ひつるを日本を世のの日本
とまひ神風ゆはるまゝとするも取知らん
世の中いれまゝを攘夷此論と好まふをいれ
よと今余も此人氣を量りて其穢を見候り兵又良
きもや否と考へ諸國海客便向うの運輸便利
のりいりいと愛をかりて彼亦いさうと大
凡見候り節道の之流はまゝは備をとりて先生
とも譽まざるうおさきりいれり向ふ見えは因循

家れまゝのまがれりいとやとん當世のこれの攘
夷論の耳ういたひり知れいりおまゝりん方り一命
と捨て夷人は掛たててまてとるゝのこもるし
一夜条約破る時を為る成るは客のやりに細ウ
長々成る形りたるあそこの漢の此浦とやめ騒ま
よいと暮りむ多骨折で身もたまりきり費費たど
れの其けふ西の方か山師り出てぬをいれで粟
の握もどるもやとどいとい公儀てりおまゝりん方
のおとそふ年うとそを後の攘夷と成さるぬ
権現様うとそ後の天下とそ事おほはる故とそい

てさし思ひ辨因循も姑息ともいふ何とも思ふ
以て余所の改事と三百年来持した
公儀でゆくは文易れまはま張りまは言まて
公儀へ敵たふす大名は潰して仕舞ふあり前
是所の由縁の事一一旦条約結んだと文
と文破約とさふ付と世界信義とさふ思ひ
と中その日本國の恥辱方とさふ過きとさふ
あり何とあつとあまらん方も三百年来
の思と文く徳川様水長や浪人よ思の
られて色とさふ昔方とさふと余所目も見て攘夷

くおひなるはニ位ナニ「チヤニ」チヤや聞えませぬ侍
を徳川人の御事理と思はるともアメリカ始より
未の事とさふひつとチヤ今更變の成りませ
り毒とさふ血と公儀の正所不随く往りませ
往て見く世帯を侍て免れ角も忠義の仕中ハ敷
らも有るありとさふ彼と先をさふよけんとさふ
ひの忠義あるふ何りなるといふ思の有る
徳川様へ身と打こみ忠義とさふなすふのくせん
とさふ世帯門マアくをがさあふとさふ一ぱん
はあぐんをさふとさふ何れも何れも何れも

幕府の為に清涼削一併せよの形勢也愚老の診察
もふ不外邪をかんりて遠く術なく奸邪裏小
入て領り小私激と起さ水長呪ふ毒毒一徳好の
病と頭は先主治由と整むを先と
大王の戒とウラ
藪苛陣波とまじり奸橋と加味して水毒と押暴勝采
と以て奸邪を速ふり内整ひて西も后外邦の
事をいんんがあひいんんまで世間と度く澄
ぬ暖も大きく心もひりけ信義の筋も弁へなるハ
物と感心世間のせまいもの穴をけぬ人ハ日本
にまは山はあり下り孔山登東山而小背登大山而

小天下不佞莖艦小多て外國航海せり日本を以て
小有りと各人又世界と挺歴せり世界も亦大とさるふ
不登れ人まことり五十年とさるれ大きな事
カロ小う答ひ鳴呼女子と小人とも養ひ難し
△先生ペケく時日ハ西山り傾き鳥ハ社くと
求む儀を友の長議論と思ひても長居せり
是と早めゆふ所を

東都の城西陰無慶塔の傍り
そして迷惑をのほほ笑とあむ
因循をたより人破行燈の下にさる

石田開本一

一 松平之河与海接之面

一 海沿至徳山及山口

一 攻号以面

号番

号番

松平之河与海接之面

海沿至徳山及山口

攻号以面

一 松平海沿至海接之面

一 海沿至関及下山口

一 攻号以面

松平海沿至海接之面

海沿至関及下山口

細川誠中号

少室京久信美

奥平之信美

少室京久信美

号番

抄書

一 松平 忠茂 与 怡 媛 之 面

松平 忠茂

一 海 谷 秋 山 口 占 攻 勢 之 面

海 谷 秋 山

一 松 平 修 理 美 媛 之 面

松 平 修 理 美 媛

松 平 修 理 美 媛

抄書

ノ 之 拾 子 度

一 陸 路 鹿 洲 占 岩 屋 寺 占 山 口 占

攻 勢 之 面

有 馬 中 齋 捕 之 花 飛 浮 寺

抄書

松 平 五 合 丸

向 井 氏 之 面

山 崎 系 信 之 面

一陸路石列ノ萩支分山官
攻寄以而

以使者

内度海石列
大徳 自反
朝金 小徳也

一海路以國古海山支分山官
攻寄以而

日

(水野宗女)

膝部 伸

至山 左末

一石月ノ関支分山官

日

多賀 親貞

也 例 海 以 部

石 列 海 以 部

一白萩支分山官

日 石 列 海 以 部

天 野 氏 七 郎

平山岩屋
八月八日

八月

石山白丸軍目付甚久幸方了得之旨

八月十六日討也状

海之元

大物段

松平重親

隠形身分は彼是に容易奉りて關係師と云

水戸殿方西之旨 仰上以承之旨に以て水戸

振目 仰付し

石籠和泉寺迄水戸殿迄是時申之旨仰り申上

八月十日迄是時申上

八月十日迄是時申上

八月十日迄是時申上

八月十九日迄是時申上

八月十九日迄是時申上

八月十九日迄是時申上

八月十九日迄是時申上

多 以多七 宣化事 得國 處 以 宣 子 款 列 以 臣
子 情 河 憐 蔡 氏 下 拾 列 以 洋 處 究 其 所
所 至 也 以 西 元 年 是 道 森 之 以 所 之 何 道 亨 下 宣
以 以 何 亨 亨 列 以 以 上

七月九日

在 夏 多 一 節

右 田 經 治 所 家 來 以 以 右 田 經 治 所 家 來 以 以

一 極 田 上 區 為 引 取 以 亨

一 米 五 百 六 拾 七 俵

一 積 二 十 二 月 四 百 文

一 積 以 下 積 七 月 文 以 下 積 十 三 月 文

一 積 在 丹 中 區 為 引 取 以 亨

一 積 子 千 兩

一 下 積 五 拾 兩

一 積 在 丹 中 區 為 引 取 以 亨

一 少 正 積 二 十 六 百 七 十 包

一 米 千 或 百 八 拾 俵

以 以 千 俵 以 米

一 積 二 百 五 拾 九 月 二 拾 兩

節死百五拾人 悟家一人 山中人 必一先引与在
得兵逃 臨年 艦上 以十八日 北岸 以 菅原 長洲 方 化
三千人 節死 下 多 与 其 矣 于 節 日

一 八月廿四日 牧野 佐治 有 及 以 節

八月廿日

松平 之 帳 美 家 来 上 之 途

禁 國 炮 殺 少 衆 必 惡 天 殺 以 力 孫 文 子 之

軍 命 衆 家 亦 下 老 之 旅 未 重 之 不 應 守 父 子 有 節

後 安 十 日 節 之 字 節 稱 号 亦 百 教 之 旨 也

行 出 以 此 後 亦 有 向 上 之 事 也

八月

一 八月廿一日

御 所 向

水 戸 中 御 所 殿

石 御 所 殿 松 平 之 帳 美 家 之 後 儀

御 上 費 之 旨 御 留 与 之 旨 上 之 旨 也

松 平 之 帳 也

後 代 後 費 亦 也

酒并雅樂氏

松平公格美為伊代

伊代書院

伊代

右於伊代書院編纂序志并刊列在書院中

伊代書院

酒并右衛門尉

口部之長 伊代書

伊代書院

松平伊代書

口部之長

伊代書

伊代書院

伊代書

松平丹波守

内及酒後書

口部之長

伊代書

伊代書

伊代書

右於伊代書院編纂序志并刊列在書院中

牧野河内守

内及酒後書

日引之長
作舟一

清齋年

清石石酒

石給芙蓉弓列電日舟一人中編

一
八月十四日

松平忠經

養父隱故昔儀以平之胎之史追討

作舟

致之無心妻之正服多下少海也

作舟見名

石於作舟書

院通齋席元中列能海前中編



